

おこりおとし（上野田町）

ブーンと飛んできて チクン。

みなさんは蚊にさされたことがありますか。おすの蚊は果物の汁や植物の汁しか吸いませんが、めすの蚊はおなかの中の卵をそだてるために動物の血を吸います。そのとき、マラリアの病原体をうつされ、むかしは突然高い熱を出して苦しむ人がたくさんいました。人々は、この病気を「おこり」と言い、おこりおとしをした話が今も残っています。

上野田の一本杉の根元に、大人の背丈より高い大きな岩があります。その岩は、むかしからおこりおとしの岩神さまとして信仰されていました。

お日さまの光かん照りつける夏のこと。外で遊んでいたお花が急にからだが寒くなってきたの



で、あわてて家へ走って帰りました。

「おつ母、さぶい、さぶい。」

と言うと、おつ母は、

「あらつ、こんね暑い日にさぶいなんてなんでもやろう。おこりかも知らん。はよう寝なはい。」
と言って、すぐにふとんをしいてくれました。

「おつ母、ふとんをもつときせて。」

ふとんを二枚も三枚もかけてもらったお花は、それでもさぶくてたまりません。おつ母がふとんの上からしつかりとかかえてやると、安心したのかそのうちにお花は、ぐっすり眠ってしまいました。

「おつ母、暑い、暑い。」

からだの燃えるような熱さで目のさめたお花は急いでふとんをはねのけ、着ていた着物もぬぎました。はだかになっても熱くてたまりません。汗びっしょりです

「暑い、暑い。」

と悲鳴をあげながら、家の中をころげまわりました。

ところが三十分もすると、どうしたことが、

「おつ母、らくになつたわ。」

とにこにこ顔。さっきの苦しみはどこへやら、いつものかわいいお花になりました。

しかし、一日おいて次の日、また同じ時刻になるとお花が、

「さぶい、さぶい。」

と、さわぎ出しました。ふとんを何枚も着せてもらい、上からおさえてもらっても寒くて寒くてからだのふるえが止まりません。

やがて、ぐっすりひとねむりすると、びっしょりと汗をかき、今度はぎやくに暑くて暑くてたまりません。

「おつ母、暑いよう、暑いよう。」

と泣きさけんでも、むかしはいい薬もないし、自然に病気のおさまるのを見守っているより仕方がありませんでした。

おつ母が心配したとあり、お花はおこりにかか
つたのです。でも、そのまま何もしないでいると
病気がますます重くなり、日おこりと言って毎日
決まった時刻に発作が出るようになります

あくる日、うっすらと夜の明けのを待ってい
たおつ母は、

「お花、はよ起きよま。岩神さまへおこりおとし
に行つてごうな。」

と、やさしく呼びかけました。お花は眠くて眠く
て仕方がありません。だだをこねていると、

「おそうなると人が起き出して見つかつてしまふ
のや。人に見つからんようにせな岩神さまは、
おこりをおといておくれんのやつて、ほんでも
いいんか。」

と言われて、しぶしぶ起きました。

お花は新しい赤いはなのわらぞうりをはいて
眠い目をこすりこすり、おつ母にせき立てられて
岩神さまにきました。

おつ母お花は両手を合わせて、

「岩神さま、どうぞおこりをおといてください。

おねがいします。」

と一生けんめいにお祈りしました。そして、赤い
はなのわらぞうりを片方だけぬいで、はだしに
なりました。今度は来た道とは反対のうら道を通
つて帰らねばなりません。

「お花や、つめとつていややるうけど、朝つゆを
ふんで帰らなおこりはなおらのやと。」

と言われ、しつとりと露をふくんだ草をふんで帰
りました。だれにも会わなかつたので、岩神さま
はお花のおこりをおとしてくださいました。

岩神さまのお守りをしていた上野田の人たちは
おおぜいの人がおこりおとしにきて、わらぞうり
をおいて帰るので、それを燃やして仕末をするの
に大変だったそうです。



岩神さまの上棟式でもらまきをした時の写真（昭和11年10月1日）